

郷 土 館 だ よ り

Vol. II No.2

1979. 12. 1



伊豆佐野のドンドン焼き (年中行事—小正月)

目 次

沢地地区の民俗をたずねて(2).....	1
郷土史の散歩道(5).....	3
テーマ展・調査レポート.....	5
行事報告.....	6
資料紹介・おしらせ・その他.....	7

郷土館フィールドワークから
沢地地区の民俗をたずねて(2)

館員(学芸員) 杉村 斉

とぶらい道(葬列の道)

沢地地区の調査に行き、老人からとぶらい道のことを聞いた。とぶらい道という変わった名称に興味を引かれたので、更に詳しく聞いたり、その道を実際に歩いてみたりした。今回のフィールドワークからは、その報告である。

とぶらい道は、沢地川の上流の山中を南北に横切っている一本の捷徑である。それは、箱根山西麓に位置する二つの部落、伊豆佐野と元山中を結んでいる。とぶらい道という名の由来は、昔この道を葬送の列が通ったことから付いたものだという。道案内をしてくれた沢地の神山さんは、明治生れの人であるが、子供の頃、この道を通して伊豆佐野の耕月寺へ向う元山中の人々のことを、見たり聞いたりしたと話してくれた。子供だった神山さんには、山の中の道を歩いて行く葬列の人々が、よほど印象的だったのだろう。

この話を聞いて、伊豆佐野と元山中へ行ってみた。

伊豆佐野は、三島市の最北端に位置する農村集落で、隣の裾野市と境界を接している。駿河の佐野と区別する意味で伊豆佐野と呼ばれている。古くからの部落である。東海道が足柄路をとっていた時代には、佐野は一つの宿場となっていて、官道はここを経て箱根山を北へ迂回していたらしい。

一方の元山中も古い部落である。東海道が足柄路から南下して箱根越えになった時には、元山中は関所の設けられた所である。現在、ここには、関所跡の史跡が残り、いわゆる箱根古道の道標になる地点として知られている。因に近世の東海道について言えば、江戸時代の東海道は、これより更に南下して、ほぼ現在の国道一号線に重なる位置で箱根越えをしている。

このように両部落とも、古道上に発展した古い部落であったという点では共通しているが、そのルートは歴史的に時代が異なっていて、箱根を東西に通過して行く本流としての同線上にはなかった。その意味では、距離は近いが、隣部落という関係ではない。また、両部落の間には箱根山西麓の東西に延びた一つの屋根と谷があった。こうし

たルートにおいても、地形においても、一見無関係に思える両部落の間に、とぶらい道を通じて交流があったことは驚きであった。

現在元山中は総戸数10戸の小部落であるが、その中の3戸(高梨家)は、伊豆佐野の耕月寺の壇家である。高梨家の若いお嫁さんに伺うと、彼女はとぶらい道を通ったことは無いが、年寄からは昔話を聞いていて、そういう道があることは知っていた。今回の調査では、具体的な昔話は聞けなかったが、とぶらい道を通して、伊豆佐野と元山中の間に、葬列以外の交流が昔から続いていたであろうことは、容易に想像されるのである。沢地の老人が見た葬列、それによって付けられたとぶらい道という名称は、この道が有する二つの部落の交流を象徴する名称であると言えよう。そしてそれは、箱根西麓を南北に結ぶ民俗の交流をも証明している。東海道が箱根を経に結ぶ官道であるのに対して、とぶらい道は箱根を緯に結ぶ民間の道であると言える。

現在、この道は道とは名ばかりで、そこを利用する人も無い。両部落の人に聞いても、老人は知っているが、中年以下の人では道の存在は知っていても、ほとんど通ったことが無いと言う。自動車社会の今日では、両部落を結ぶ道は、三島の町を通過して行くコンクリート国道だけとなった。

大人の足で歩けば、全行程を一時間ほどで歩ききってしまう距離であるが、この忘れ去られる寸前の道には、確かに人々の歩いた足跡が残っており、人間の交流のぬくもりが感覚されるように思えた。

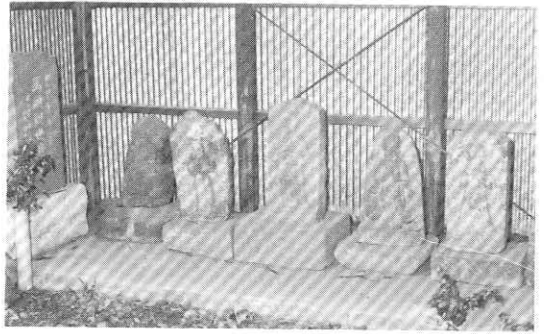
とぶらい道をたずねて(道の民俗)

とぶらい道を実際に歩いてみた。道案内をして下さったのは、沢地の神山一さんと伊豆佐野の遠藤卓郎さんのお二人であった。スタート地点は伊豆佐野の耕月寺である。藍の沢を経て、畑のある尾根の峠に向う途中に道標がある。一方に向えば箱根越えになるいわゆる東西の道で、もう一方は元山中へと延びている道だ。峠に出ると、谷の向う側に元山中の家屋が手の届きそうな所に見える。ところが道は楽ではなかった。一度沢地川の谷に降りてから、もう一度向うの尾根に登らなければならないからだ。

以下この道を歩いた時に見つけることのできる「道の民俗」を、写真と説明で御案内します。



1 伊豆佐野の耕月寺は十一面観世音を本尊とする曹洞宗の寺である。



5 小さい堂の中に馬頭観音像が集められている。



2 耕月寺境内にある横道供養塔



6 道標は大正7年に高梨弥兵が建てたものである。



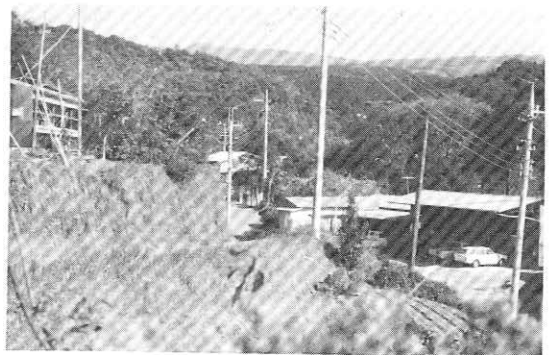
3 佐野中村にある丸彫のサイの神二体



7 元山中に入るとすぐ目につくのがこの瘻申塔だ。



4 佐野藍の沢にあるサイの神。向って左側の双神像は伊豆には少ない形である。



8 瘻申塔とサイの神が建つ場所から元山中の部落が見渡せる。

郷土史の散歩道 (5)

中空の日記

館長 長谷川福太郎

「香川景樹」が、門弟の菅名みさを(節)、石田のりひで(孝一)の両名を従え、兎山・柳下・菅沼ら多くの門人の見送りを受けて、江戸を立ったのは、文政元年(1818)神無月(10月)23日のことであった。

ことし春きさらきの頃より、江戸にまかりとどまりけるか、しはらくいせの国へまかりのほる事いてきて、まつ尾張の国なる津島までとこころさす。

と日記の最初に記されている。

この一行が泊りを重ねて、箱根宿に着いたのは翌11月の6日のことであった。実に江戸を出てから13日目当たる。足の早い人ならば、もはや京都までも行き着ける日数である。

さて、関所に近い湖畔の旅籠に一夜を明かした一行は、7日の朝早く宿を立てている。その時の菅名みさをの歌に、

夜をこめてたれかたちけん松の火の

こぼれし跡ぞ霜に見えける

の一首がある。これは関所番の照明の跡であろうか。あるいは、夜中松明を燈して箱根路を越えて来た旅人たちが「明け六つ」の開門を待っていた跡であろうか。

かつて、筆者が三島のある古老から聞いた、「昔は箱根へ登る旅人の松明が、三島からもきれいに見えたものだ」ということと合致する

しかし、一説では夜中箱根路は旅人は通れなかったともいわれている。どんなものであろうか。

箱根宿を後にした景樹らは、むこう坂から風ごしに掛かる。

かさこしのしのかや原ふみわけて

さやかにみつるふしのしら雪

これは、菅名みさをの歌である。しかし、今の人には、こうした地名も縁がない。

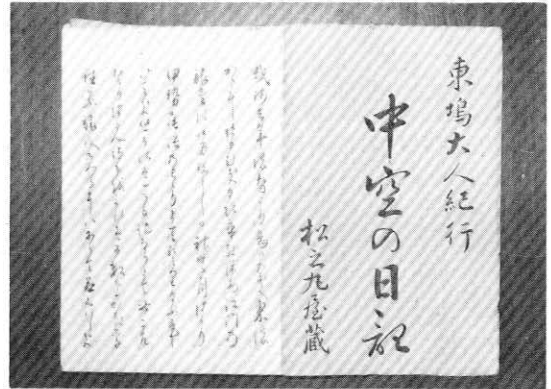
石はら坂におりくれは、伊豆の海原見えわたる。鎌倉のまうち君(実朝)の、沖の小島に波のよる見ゆ、とよみ給へりしは、いつこなるらん。たた

天城の大島のみそ、遥かに打むかひたる。むかしの古道よりは、さる小島もやみえつらん。

伊豆の海や沖に小島は見えねとも

よりけん波そおもかけにたつ

大枯木にくれは、駿河の海もひとつに見えて、薩埵山まゆのことし。



「中空の日記」市内佐野 勝俣庵氏寄贈

海原の雲みかくれの一むらの

はなれ小しまやみほのまつはら猶くたりて富士見たひらにかかる。けに名もしるく、雪のすかたのこりなくあらはれて、磨き出せる玉に似たり。宝永山こなたさまにむかへるを、みさを(菅名みさを)仰きみて、此庇や千古の恨とひとりこつをききてよめる。

天の下ふたつたになき白玉の

かけたる歎きたれかせさらん

上長坂にやすらふ。此岡の西のかた、十歩はかりさし出て見るに、南北ひとつになりて打ひらきたり。おきつ波こなたの嶺にかへり、目の前の松は高ねの雪にそひえたるなど、名たたるかきりはいふもさらなり。数ならぬ谷のはさま岡のつらまてけしきさらに尋常ならず。はこねちの眺望は此所を第一とすべきにやあらん。山中の里はさきの月の末つかた、残らすやけうせて、春みつるなこりもなし。板もてかこへる家ところところものうるめり。

山中の松の常磐も大かれ木

小枯木とこそなり果にけれ

さき原より、小時雨大しくれをくたりて、松原をひたりにのほりゆけは、初音が原なり。かきりなくおもしろき所なれとも、人おほく立よらす。

引うえいつの初ねが原ならん

はつねが原はしる人もなし

それよりななめにゆきて、今井坂の上なる、愛宕

の神のうしろにいつ。もりの木立にたちまじりて
紅葉いまた残れり。おほろなる夕日さしなひきて
ものすこし。禁^{ふし}の方にや

賤^{しず}の女が夜寒のころもおる機^{はた}の

声の外には音なかりけり

さてつひにくたりはてて、三島の社にまうつ。いと
ひろき御かきの内、見奉りめくるをりしも

散りかかるいてふの一葉袖にうけて

やかてもぬさと手むけまつらん

おのかものなるをとのたまふへし。ここゐの森も
このほとりとおもふに、よそにそききすてかたき
ひとの親のここゐの杜の木からは

身をわけてふくこちこそすれ
そそろ寒く、日もくれんとすれはととまりぬ。此
さとに三島曆とて、世に名高くものせるは、こと
なるふしもやあらんすらんと、かひもとめて見る
に、たたとちの冊子にて、そのさまのみそかは
れる。やかて来ん春の事はしめなど見極るも、中
々こころほそきこちして

はかなしや五十あまり年月も

夢とみしまのこよみなりけり

以上が、景樹の「中空の日記」に記された、箱
根西坂から三島宿へ掛けての紀行である。

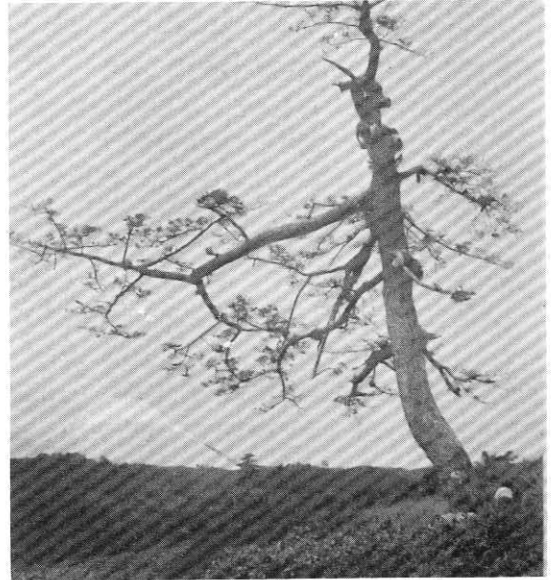
文中景樹が、箱根路の眺望は此所を第一とすべ
きにやあらん、と激賞している辺が、現在のどこ
に当たるか、ちょっと捕えにくい。

それは、山中の里（山中新田部落であろう）の
位置が、富士見平や、上の長坂よりも下にあるか
のように記述されているからである。

どうも、景樹は笹原新田を山中新田と、三つ谷
新田を笹原新田と取り違えたのではなからうか。
もしそうだとすれば、文中の地名と現在のそれと
がぴったり一致する。（ただ、^ミ山中の松の常磐
も大かれ木小かれ木とこそなり果にけり、の歌が
笹原新田では意味がなくなる。景樹の思い違いか
上梓の時の手違いであろうか。）

どうやら、箱根路第一の眺望の地は、笹原新田
「一柳庵」の裏側一帯の台地ではないかと思われ
る。西坂一帯の畑が、大根の濃緑に埋められる頃
一柳庵裏の台上（現在は墓地になっている）に立
てば、遠景に新雪に輝く富士を、中景に松の常磐
に栄える箱根の山脈を、近景に打ち続く大根の畝
を配して、箱根路屈指の眺望を経験することが出
来る。私はここが景樹に第一といわれた所と、信
じてやまない。

ところで、この日記に依ると、山中新田は文政
元年10月に、大火災に見舞われたことになる。
消火設備の幼稚な時代、しかも水利の悪い山地の
火が、如何に恐ろしいものであるかを景樹は訴え
ている。



「御座松」市内川原ケ谷 栗原峻一郎氏所蔵

なお、源 頼朝が名付け役になったといわれて
いる「初音が原」は、現状よりもはるかに景勝の
地であったことがわかる。

もともと、此所には頼朝の御手植えといわれた
「御座松」をはじめ、枝ぶりのよい老松が数多く
あったものと思われる。彼の「東海道分間図」に
も「御座松見事なり」と特記されている

（この御座松は、川原ケ谷栗原家の所有で、大正
の頃まであったらしい。その写真が先頃郷土館へ
同家から貸与された。）

最後に「三島曆」については、景樹も大きな期
待を持っていたと述べている。

江戸時代後期の、日本の代表的歌人であり、文
化人であった彼が、三島曆に強い関心を持ってい
たことは注目し得る。それは三島曆が、当時全
国的に数の多かった地方曆の中で、特に名声の高
かったことを意味するからである。

景樹一行が、その夜どこに泊ったかは、わから
ない。翌日雨の中を西に向かっている。

（註 中空の日記は市内佐野、勝俣 巖氏が三島
市へ寄贈したものである。なお引用文は、全部原文
のままとした。）

テーマ展「郷土の染めと織り」

54年11月15日から55年2月15日まで、テーマ展示「郷土の染めと織り」を開催しています。この展示品は、伝統工芸としてもてはやされるようなものではなく、日本各地どこにできあつたような素朴な染めと織りの展示でした。

一昔前まで、どこの村や町にも紺屋と呼ばれる染物屋があつたものです。紺屋の染物は、その名のとうり藍染めがおもな仕事でした。藍で染った布は、人々のはっぴやはんてん等の仕事着になったり、フトン皮の唐草模様になったり、日常生活にあふれていました。

手機については、私たちの祖母に聞くことができます。農村では、間取りに機部屋のある家が多くあつたと聞きました。機は女の仕事として、家庭の衣生活を支えてきたと聞きました。

今回のテーマ展示は、このような衣生活の民俗と民俗文化財を収集したものです。

調査レポート

戦国の世と三島

～笠原新六郎と蔵六寺～

戦国時代、三島は後北条氏の分国伊豆国にあつた。「戦国」と言えば、下剋上の世と言われる位に秩序の乱れた時代で、各大家の内紛、家臣の裏切りも多かった。こうした時代でも、後世、後北条氏のみは例外と思われてきた。しかし、後北条氏にあつても、目立つ程でないにしても、他家と大同小異であつたらしい。

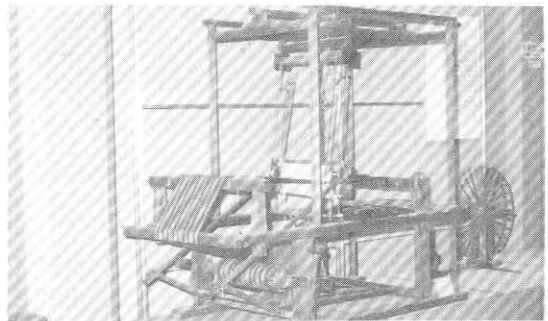
三島市御園にきれいざんぞうくし亀霊山蔵六寺がある。この寺は三島駅より南に約5.9kmに位置し、天文2年(1535)に開創されたとされる寺である。開基は後藤石見守(現当主は後藤基信氏、三島市御園に住す)と思われ、この人が友人である正厳和尚を招いて開山としたと伝えられている。寺伝によれば、この正厳和尚は、後北条氏の家臣の笠原新六郎であるとされている。



展示概要

1. いろいろな繊維
2. 織物のできるまで
3. 農村の女性と手機
4. 草木染料
5. 染める
6. 三島の染織業
7. 手機体験コーナー

※出品協力者※中村羊一郎氏(静岡市)、井上一雄氏、井出昌治氏、高林保巨氏、樋口正智氏
(以上三島市)



たがはた
高機

笠原新六郎は、後北条氏の家老松田尾張守憲秀の子であり、笠原氏の養子となり、笠原を名乗っている。新六郎は駿河と伊豆の国境にある徳倉城主であつたが、天正8年(1580)12月22日、三島心経寺の僧の勧めに従って、主君北条氏直に反して、武田勝頼に降っている。その原因は、氏直に脆弱だと罵られたからだと言われている。

ところが天正10年(1582)3月になって、武田方の形勢が不利になると、新六郎は今度は、小田原に向いて詫言を入れ、後に僧となって蔵六坊と号して、伊豆国御園村に至って、十王堂に住んだと言われる。亀霊山蔵六寺はこの十王堂を改めて号したものである。亀霊山という山号も亀のごとく頭、手足、尾の六本をかくす(蔵)意味から来たようである。

しかし、亀霊山を号した新六郎はその後かならずしも亀のごとくとはならず、天正18年(1590)の豊臣秀吉の小田原征伐の時には、父松田憲秀と密かに通じ、火を小田原市街に放って、敵を導こうと企だてている。この企ては露見して事は成就しなかった。戦国乱世を生きぬくことは凡夫ならずとも迷うところであつた。(稲木)

行事報告

～縄文土器作り～

縄文人の知恵と技術にチャレンジしてみようということで、中学生といっしょにやってみました。結果から言えば、ほぼ成功と言えました。しかし反省点も多く、また来年も頑張ってみるつもり。

今年の日程は、次のような順序で行ないました。

- 1日目(8月26日) 用土作りで大汗を流す。
- 2日目(9月2日) 成形作業で頑張る。
- 3日目(9月9日) 研磨で希望が湧いてきた。
- 4日目(9月24日) 野焼きの煙で涙を流す。



青少年小決の里で野焼きをした。

～講座「郷土の民俗芸能」～

日9時 9月16日(日)

講師 三浦吉春氏(日大図書館勤務)

今年度三島市において、伊豆目俗芸能祭が開かれました。静岡県の東部や伊豆地方には、多くの民俗芸能が伝承されていますが、それを見ることのできる人は限られた地域の人だけでした。その点では、今回の民俗芸能祭は有意義なものでした。

郷土館では、この催しに関連させて、郷土の民俗芸能をより専門的に学んでみようと、三浦先生にお願いして開いた学習会でした。



正月七日の三嶋大社のお田打祭

～県外歴史探訪「鎌倉めぐり」～

9月23日、郷土館長の案内で「鎌倉めぐり」を行ないました。快晴の秋の日、古都鎌倉を歩き、頼朝と政子の歴史を偲ぶことができました。

コース

寿福寺(政子、実朝の墓)→鶴ヶ岡八幡宮→頼朝の墓→永福寺跡→瑞泉寺



集合地八幡様の石段の下で。

～市内史蹟めぐり～

私たちは、自分の住んでいる土地の歴史や民俗については、案外知っているようで知らないことが多いものです。この企画はこうした人のために、数年来続けてきたものです。今年は、頼朝にゆかりのあるわが町の史蹟や伝説の地をめぐる、新鮮な驚きを得ることができました。

日時 10月14日(日)

案内 郷土館長

コース 三嶋大社→法華寺→妻塚→間眠神社→高源寺(函南町)



法華寺の墓地内で頼朝の経塚について聞く。

資料紹介 あい たま **藍玉** と あい がめ **藍甕**

テーマ展に因んで、藍玉と藍甕について紹介します。藍は草木染料の王と言われ、江戸、明治時代を通じて、庶民の衣類を彩ってきた。藍はそれ自体で覗き色・浅葱・缥・紺などを染めるが、一般的に知られているのは紺である。藍染の技術は難しく、紺屋は藍染の専門業者として、人々の間で大いに利用された。

藍玉は、開花直前の藍を刈取り、この葉を乾燥させ、寝床という建物内で施水醗酵させ染とし、さらにこれを藍白で搗き固めて作られたものである。文字通り藍の染料の固まりで、これを水、灰汁、石灰、小麦粕とともに藍甕に入れて藍染を行なうのである。藍甕の中の藍は、夏期以外は温度を加えて醗酵させて溶解させなければならず、このことを「藍を建てる」といい、紺屋の重要な仕事であった。

古い三島の染物屋のことを語る職人さんは、昔をなつかしむように話してくれた。「前はな、どこの紺屋にも、二十や三十の甕が有ったもんだがなあ。」と。

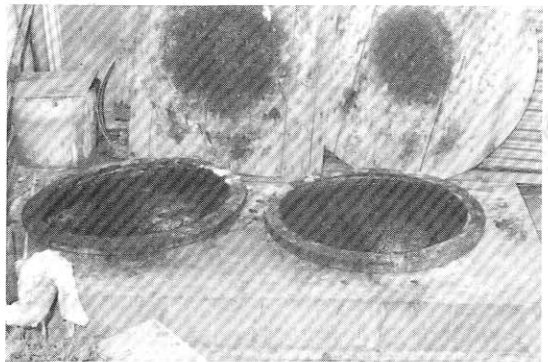
★★★★★ お し ら せ ★★★★★

■ 郷土館の行事予定 ■

- 11月15日(木)～55/2月15日(金)
秋季テーマ展「郷土の染と織」
- 12月16日(日)体験講座「おかしり作り」
- 55/1月27日(日)体験講座「初午幟り作り」
※申込、問い合わせは郷土館まで

■ 展示案内 ■

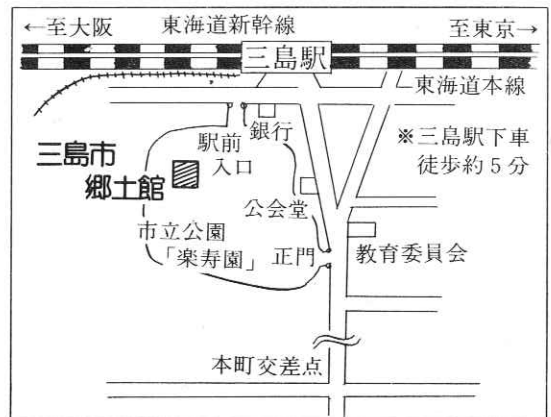
- 一階 テーマ展「郷土の染と織」
三島の水と染物屋、各種の染、染織りの道具などを見ることができます。
- 二階 「ふるさとを求めて」
三島には、祖先たちが残してくれた貴重な生活文化財(民具、農具、三島暦、三島傘、はたおり道具、三四呂人形など)昔の人々の生活を見ることができます。
- 三階 「郷土のあけぼの」
箱根山中や、千枚原に集落を形成し、狩や漁の生活をしていた縄文時代から奈良、鎌倉、江戸時代に残された(石器、国分寺瓦、宿関係古文書など)見ることができます。



上は藍玉、下は藍甕

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.5

昭和54年12月1日発行
(年3回発行)

編集・発行 三島市 郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL 0559-71-8228